



糸賀一雄研究(3) : 「発達保障」の思想と実践 : 近江学園70年・びわこ学園50余年のあゆみ(要旨)

渡部, 昭男

森本, 創

垂髪, あかり

(Citation)

日本特殊教育学会第54回大会(2016新潟大会) 自主シンポジウム20 糸賀一雄研究(3) : 「発達保障」の思想と実践 : 近江学園70年・びわこ学園50余年のあゆみ

(Issue Date)

2016-09-17

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006474>



糸賀一雄研究(3) : 「発達保障」の思想と実践 —近江学園 70 年・びわこ学園 50 余年のあゆみ—

企画者：渡部 昭男 (神戸大学大学院人間発達環境学研究所)

司 会：渡部 昭男 (神戸大学大学院人間発達環境学研究所)

話題提供者：森本 創 (滋賀県立近江学園)

垂髪あかり (日本学術振興会特別研究員/神戸大学大学院人間発達環境学研究所)

KEY WORDS : 発達保障、近江学園、びわこ学園

【渡部 昭男：企画の趣旨】

2014 年は糸賀一雄 (1914-68) の生誕百年であり、第 52 回大会 (高知大学) では、自主シンポ「糸賀一雄生誕百年：史資料の発掘・整理・保存と糸賀一雄研究の展望」を開催した。その後、次なる百年にこれまでの糸賀一雄研究を継承発展させるべく有志で「糸賀一雄研究会」を立ち上げ、第 53 回大会 (東北大学) では、同「糸賀一雄『ミットレーベン 故郷・鳥取での最期の講義』(1968 講義/2014 発行) を読み解く—糸賀一雄研究(2)—」を開催した。「糸賀一雄研究(3)」となる今回は、2016 年が 1946 年の近江学園開設から 70 周年にあたり、1963 年のびわこ学園開設から 50 余年が経過したことを踏まえて、両園のあゆみを整理分析する作業を通して、「発達保障」の思想と実践に迫ることとした。

なお、糸賀一雄の思想と実践を海外に発信する取り組みとして、英文紹介 (Special Education in Japan : The Last Message of Kazuo Itoga : Let These Children be the Light of the World : A Historic Perspective of "Guaranteeing the Right of Development to All") と韓国語仮翻訳 (渡部ほか『糸賀一雄の最後の講演—愛と共感の教育— 韓国語への仮翻訳にあたって』) をこの 1 年で行った (いずれも神戸大学附属図書館 Kernel にて入手可能)。

【森本 創：「発達保障」の思想と実践—近江学園 70 年のあゆみ—】

近江学園は、終戦翌年の 1946 年 11 月、糸賀一雄、田村一二、池田太郎らによって、滋賀県大津市に設立された。学園では、「生活、生産、教育」を三本柱として、それまでの教育理論では否定的に考えられていた障害のない戦災孤児と知的障害児の統合教育を目指していた。職員は「四六時中勤務、耐乏生活、不断の研究」という三条件の下、戦争によって深く傷ついた子どもの社会復帰のため努力していた。

したがって、学園が当初対象と考えていた障害児は、当時一般的に教育効果があると考えられていた比較的障害の軽い子どもであり、重度障害児は学園の対象ではなかった。しかし、創設時より重度障害児も受け入れていた学園では、彼らのために「さくら組」をつくり、1950 年「さくら組」を「落穂寮」として独立させ、その後もその時々課題に対応するため、次々と新しい施設をつくってきた。

糸賀は、教育の対象ではなく医療や保護の対象であると当初考えていた重度障害児たちが、「さくら組」や「落穂寮」などの実践の中で、少しずつではあるが確実に成長する姿に触れることで自身の価値観を大きく転換させ、どんなに重い

障害児にも無限の発達の可能性があることに気づく。さらに 1956 年、学園との共同研究に取り組んでいた京都大学教育心理学教室より田中昌人を迎えたことにより、その考え方は「発達保障」思想として大きく発展し、西日本で最初の重症心身障害児施設「びわこ学園」を開設する。

1968 年の糸賀の死後、田中も京都大学に戻り、1971 年に現在の滋賀県湖南市へ移転する際には多くの職員が退職し、学園は長い混乱期を迎える。そして現在、被虐待児や発達障害児が過半数を占める中で、学園は新たな挑戦を始める。

【垂髪あかり：「発達保障」の思想と実践—びわこ学園 50 余年のあゆみ—】

「びわこ学園」(1963 年、重症心身障害児施設) では、その 50 余年のあゆみのなかで対象児が質的に変化してきた。特に、重度の障害児で編成された「第一びわこ学園」(現「びわこ学園医療福祉センター草津」) では、「療護児」から「重症心身障害児」(以下「重症児」)、さらには「超重症児」へと対象が推移し、療育思想や実践内容が変遷した。

近江学園時代の「療護児」や「びわこ学園」創設初期の「重症児」への実践において見出された「ヨコへの発達」「重症児の生産性」(1950-60 年代) という考え方は、対象の重症化とともに「いのち」「快」「関係の保障」という新たな視点を産み出しつつ、実践が展開された (1970-80 年代)。そして、ノーマライゼーション思潮を背景に、「重症児」であっても「ふつうの生活」を保障することが目指されていき、療育環境や実践内容も工夫されていく (1980-90 年代)。さらには、「超重症児」の受け入れにより「QOL」を重視した実践展開に移行している (1990-2010 年代)。

1950~60 年代に糸賀一雄・岡崎英彦・田中昌人らが「発達保障」思想を共創する際に、子どもの「内面」「生きるよろこび」「生き方」「自己実現」の追求を出発点とした。「発達保障の源流」は、「びわこ学園」の 50 余年にわたる療育創造のプロセスのなかで「いのち」「快」「関係」「ふつうの生活」「QOL」といった新たな視点となり、その内実を豊かにしてきた。「びわこ学園」の創設理念でもあった「発達保障」は、用語自体としては公式の刊行物にあまり記載されていないが、その「思想」は「基盤」と「方法」(糸賀一雄『福祉の思想』日本放送出版協会、1968 年、p.172) という次元で具現化され、今では「生きることが光になる」(2014 年/出版物のタイトル、HP の標語など) と要約されている。

(WATANABE Akio, MORIMOTO Tsuguru, UNAI Akari)